

SEEP

第 2 0 号 0 9 ・ 7 ・ 2 6 発 行
代 表 山 本 宏 文
奈 良 県 葛 城 市 竹 内 290-2
Tel & Fax (0745) 48 - 5174

Saiwa Education Program(サイワ教育プログラム) E・mail saiwa - yokiyusan@kcn.jp

第 1 0 回 タイ支援活動を実施

タイ国チェンライ県での支援活動も、今回で10年目を迎えさせて頂いた。この活動を続けられるのは、ひとえに支えて下さる皆様方のご協力があったからこそ、スタッフ一同より感謝しております。

さて本年の活動は、山本、山本るみ子、二宮の三名が、6月3日から11日までの9日間にわたって現地を訪れて、種々の支援活動を実施した。支援内容は、例年通り、ファイマサン小学校での奨学金、衣類や学用品、更にはゴムゾーリなどの支援品を提供などでした。さらに本年、新たらしく大学生二名に奨学金を提供することにした。また、日本の子供たちの描いた絵を持参し、現地の子供たちが描いた絵を持ち帰りそこに手渡す、いわゆる絵画の交換をお手伝いした。

以下、順を追ってその時の模様をお知らせ致します。

現地まで

6月3日午前9時過ぎ、私たち三名は関西国際空港に集合した。4階のタイ国際航空カウンターで機内へ預ける荷物を渡し、搭乗券を入手する。身軽になったところで、3階へ降りしばし休憩する。これからの支援活動のことなどを話しながら、気持ちはもうタイへと行っていた。11時45分発のTG623便に搭乗するので、その1時間前には出発ゲートへと行く。並んでいる免税店を見ながら、時間が来たので飛行機に乗る。今年は石油の値段も落ち着いたので、燃油サーチャージも少なく、タイ往復のチケット代金は、昨年より1万5千円ほど安かった。

機内はほぼ満席であった。離陸後しばらくして、ジュースやアルコール飲料などの飲み物と昼食が配られた。後はバンコクへ着くまでの約6時間、くつろげるひと時である。久しぶりのタイ産ビール(シンハー)に舌鼓を打ちながら、機内食を味わったのち、ひと休みした。

到着したバンコクの空港はたいへん大きく、また容姿や服装の異なる国の人びとが多数いて、ひととき賑わいのある所である。私たちはチェンマイ行きの国内線に乗り換える



(バンコクの空港)

ため、そこで約1時間30分待った。国内線の飛行機へはバスで移動。外はバンコク、ムツとする暑さのなか、タラップを上り自分の座席へ座る。1時間あまりのフライトで、目指すチェンマイ空港へ到着。

税関を通るとき一つの問題が発生した。というのは、衣類や靴下、その他の支援物資に税金をかけるというのである。実は、こんな事があるかということで、前もって拠点の学校のチェッサダー校長先生から「支援物資要請状」を郵送してもらっていた。その書類を見せても埒があかなく、また言葉が分からないので、現地協力者のアヌチットさんに来てもらう。交渉の結果、620パーツの税金を支払うことになった。

ともあれ一件が落ち着き、ホテルさし迎えの車で、常宿であるモンレーホテルへと行く。

その後、アヌチットさんを交えて夕食を、久しぶりのタイ料理をおいしく頂いた。

支援品の準備

翌4日、朝早く起きホテル近くの市場へと市内を散策する。6時頃には、托鉢のためのお坊さんがたくさん歩いていた。われわれも、分からないままに少しの布施をする。見ていると、市場で買った食事などを渡している人が多かった。

8時前、今回も通訳をお願いした竹村さんがホテルに来て下さった。氏は現在、このチェンマイ県で得意のタイ語を生かした事業活動をしておられる。数年前から、私どもの求めに応じ、快く通訳を引き受けて下さった。

通訳の竹村さん、現地スタッフのアヌチットさんと、みんな揃ったので、運転手付き一日1,500パーツのレンタカーに乗り、150km余り離れたチェンライ県へと出発する。チェンマイの市内は車が多いが、外に出るとそれも少なく、実に快適なドライブである。これからの支援活動の進め方などについて話し合い、あるいは外の景色を楽しみつつの3時間弱の旅である。以前も書いたが、タイの道路事情は非常に良く、2,3車線ある国道など日本の高速道路以上の道幅があり、また車の数も少ない。



(早朝の風景)

昼前にチェンライ市に着いた。いつものホテルに荷物を預け、とりあえず昼食ということで、これまた馴染みの食堂へと行った。食堂の主人は中華系で味付けも良く、いつ行っても客はいる。私たち日本人にとってタイ料理は「辛い」という印象が強いが、焼き飯や野菜炒めなどは、まったく辛くなく、実に日本人の口に合う料理である。

食事ののち、明日ファイマサン小学校300人余りの児童に渡すゴムズーリやノート・鉛筆などを近くの間屋街まで買いに行く。この間屋の主人も顔馴染みで、一年ぶりの私たちの顔をよく覚えていた。

別枠の奨学生

もう8年前から奨学金を渡しているティダラットさん(大1)と、昨年から渡している従姉弟のポンサコーン君(中3)。ティダラットさんに初めてあった頃は、彼女は両親がいないのであろうか、非常に寂しそうに感じた。が最近では明るくなり、自分から話しかけることも多い。彼女の話によると、隣のパヤオ県の大学を志望していたが、おばあさんの足の状態が悪いので、通学できる距離にある、同じチェンライ市内のラパチャット大学に変更したのである。

ここで彼女の大学のことを少し紹介すると、同大学は四年制で、6月1日から始まり、9月30日までが前期、後期は11月1日から翌年3月16日までである。彼女はスチュワーデスを希望しているので、英語コースを選択した。このコースは2グループに分かれ、1グループは60人である。授業は1日5～6時間あり、ほとんど英語でおこなわれているらしい。

奨学金は、大学生になった彼女には1万バーツを、また中学三年生のポンサコーン君には2千バーツを渡し、これからもしっかりと勉強し、社会に役立つ立派な人間になるよう話をした。それと共に、手土産として持参したタオルセットとTシャツなどを渡した。

そうこうするうちに、ちょうど夕食の時間となったので、お祖母さんや他の方も交え、総勢10人ほどが、近くの食堂で食事をした。この子たちは普段、ほとんど食べたことのないようなものを注文した。と言っても、特別な料理を頼んだのではないが、テーブルには10品目ほどの料理が並んだ。いろんな話をしながら、タイ料理に舌鼓を打ち、楽しいひとときを過ごす。これ

だけのものを注文しても、金額は日本で食べる二人、三人分程度であった。

食事ののち、また来年会うことを約束し、元気で過ごすようにと別れ



(ティダラットさん)



(ポンサコーン君)

た。なお最近来たティダラットさんからの手紙を次に紹介します。

ティダラットさんからの手紙 (09・7・3)

こんにちは、おじさんお元気ですか。みなさま方はいつ日本へ帰ったのでしょうか。いま日本の気候はどうですか？こちらチェンライは雨期で、雨が毎日降っています。ですから学校へ行くのに傘を手放せません。私たちタイ人は、余り傘を持つことを好みませんが、雨に当たって風邪を引いてもと思うと、なかなか傘は手放せません。

さて私はいつも、おじさんやおばさん、またスタッフの皆さん方に感謝しております。毎年々々奨学金を頂いて、お蔭で勉強が出来ることに、ほんとうに有難いと思っています。

私も従兄弟のポンサコーンも、戴いた奨学金は勉強のこと以外に決して使いません。そのことを固く約束致します。そして立派な人になるよう努力することを約束致します。

今後とも、私たちの勉学の上にお力添え下さるよう、よろしくお願い致します。

Tidarat Hleechuay

フェイマッサン小学校へ

さて、いよいよメインの活動であるファイマッサン小学校での贈呈の日がやってきた。この活動にご協力下さっているみなさま方の一年間の努力、その力を集大成した日である。

朝8時過ぎホテルを出発し、途中から曲がりくねった山道を進み、目指す学校へは10時前に到着した。

この時期は雨期、よく雨が降る。と言っても、長時間降り続くのではなく、大粒の雨が降ってきたかと思うとじきに止む。それが日に何回もある。その日も雨模様で、校庭には大きなテントがいくつも張られていた。校長先生以下多数の先生方、さらには教育委員会の方々の、また子供たちからも歓迎のあたたかい出迎えを受けた。

チェッサダー校長から、チェンライ県第二教育局長の紹介を受け、その他近くの学校の校長先生などの紹介も頂いた。所定の場所に着き、いよいよ贈呈の式典が始まる。参考のため、式典の次第を紹介する。

- 1, 校長先生の挨拶、ここで今日までの私どもの活動状況などを詳しく話された。
- 2, チェンライ県第二教育局長挨拶、その中で、私どもの活動に対する感謝の言葉。
- 3, 山本挨拶、メッセージを読む。
- 4, 奨学金その他物品の贈呈
- 5, 奨学生の親から手土産を頂く
- 6, 記念写真の撮影

贈呈式の様子



次ぎに、代表の山本からファイマサン小学校の子供たちに、メッセージとして次のような話をした。

フェイマッサン小学校の子どもたちへ贈る言葉（09・6・5）

ファイマッサンの皆さん、こんにちは。今年も私たち4名はここに来ました。

はじめに私たちの紹介を致します。私は山本です。そして、通訳を下さっているのが竹村さん、次に二宮さん、そして山本るみ子さん、の4名です。私たちは昨年もこの時期に来ましたね。皆さんも覚えているでしょう。

さて、私たちが来たのは、皆さん方に奨学金や学用品、さらにはゴムズーリなど、いろいろな贈り物を持ってきました。この活動はもう10年ほど前から毎年続けています。

ではなぜ、こういう活動をしているか、ということについて少しお話を致します。私は日本で次のように教えられました。人間は、一人では生きていけない、みんな支え合って生きている、つながり合って生きている。と教えられました。だから、人間はみんな兄弟として、仲良く助け合って生きなければならないのであります。

また、いま私たちがここにいるのは、日本の多くの人の支えがあって、このように皆さんの前に立っているのです。私たちはいろんなものを持ってきましたが、これらすべては、数多くの日本の人々の善意の集まりであります。

例えば、小さい子どもさんが、自分に貰った小遣いを少しずつ貯めて私に渡してくれました。またもう働くことのできないお年寄りが、貰った年金を私に渡してくれました。さらには、古新聞やアルミ缶などをリサイクルし、その収益金を渡してくれました。このようにして、本当に多くの日本の人々の善意を、私たちが今ここに届けています。

どうか皆さんも、大きくなったら、この国のため、この国の人々のため、さらには世界の人々のために役立つような人間になってください。皆さんが、世の中の人々のために役立つ人間になることが、日本でこの活動を支えて下さっている、多くの方々への一番大きなお礼になります。そのためにも、いまはしっかり勉強に、運動に励んでください。そして立派な大人になってください。私たちは、それを祈っております。



(サンダルの贈呈)



(サッカーボールの贈呈)

新しい奨学生

昨年の機関誌で紹介しましたが、タイにはOBTという行政組織があります。そこからの要請で、新たに大学生一名へ奨学金を提供するという活動がスタートした。

OBTはどのような組織かについて簡単に説明します。OBTは地方行政の組織で、町単位に設けられている。当地のOBTは26村から構成されている。活動目的は、町発展のために企画立案し、実施するものである。また、財政は、各村からの税金と、国からの援助金が収入源で、い

きおい大きな町が財政的に豊かで発展が早い。大きな所では、年予算7000万バーツもある。その仕事内容は、水道敷設・道路舗装などのインフラや、奨学金支援など生活向上のための活動もあるが、その地方で独自の取り組みもしている。以上がOBTの概要です。

昨年、OBTと協力し、新たに奨学金を提供する人をタリカ・タホンさん（18才）に決定しました。彼女は、今年バンコクにあるラムカムヘン大学法学部に入学した。そこを希望した理由



(OBTの責任者に、奨学金を手渡す)

は、法律にあまり詳しくないため、つい不利益を受ける山岳民族のため、自身が法律を勉強し、みんなに役立ちたいとのことである。これからの彼女の成長が楽しみである。なお、奨学金の支給条件については、昨年の機関誌一第19号を参照して下さい。

奨学生の家へ

学校で昼食を頂いたのち、校長先生の案内で、車で5分ほどの所にある奨学生の家二軒を訪ねた。この辺り一帯は赤土で、山の斜面を利用し、いわゆる高床式の家が建てられている。そして家の周囲にはニワトリが放し飼いされ、バナナやマンゴーなどが実をつけている。自然が豊かな地域である。



(奨学生の家を訪問)

最初の家は、スワナー・チャン (Suwanna Janu) さん、小学校四年の女の子である。両親との三人家族で、父は元気に畑仕事をしているが、今日は町の病院へ薬をもらいに行き留守であった。46才になる母は、糖尿病で薬を飲んでいるが、右目が不自由とのことである。奨学金を何に使っているのか尋ねると、カバンや衣類などに使っている。なお教科書は無料で配布されている。彼女は、朝6

時30分に起床し、少し離れたところ

にある、地区共同の貯水タンクへ水をくみに行くのが日課だ。その水は煮立てて炊事にまた飲料にしている。

二軒目は、そこから少し歩いたところにあり、スワナー・チャガ (Suwanna Janga) という小学三年の女の子の家だ。父は亡くなり、お母さんと兄、姉の三人兄妹である。兄は畑仕事や、一日100パーツほどの日雇い仕事をし、月給は1,500パーツほどになる。姉は小学五年生で、遠く離れた福祉施設の世話になっている。ムス族という山岳民族のこの人びとは、タイ語が話せないで、スワナーちゃんの通訳で親御さんと会話している。やはり言葉が出来ない、また文字が分からないというのは、大きなハンデーになっていると感じた。30分ほどの滞在時間であったが、人びとの生活ぶりを聞かせて頂き、お母さんに手土産を渡して、この家をあとにした。

以上で、今回のタイ支援活動の報告を終わります。皆さま方からの善意を、そのまま丸ごと届けたい。またこの活動を通じて、タイの人びとの暮らしが少しでも豊かになるよう、そのお手伝いをしたい。この目的に向かって、一步々進んでいきます。が、しかし反面、この活動から私たちが教えられることも多々あります。いま日本にはなくなりつつある、満天の星空などの豊かな自然、さらには子どもたちの輝く瞳など、ものが豊かになるほど、逆に心が貧しくなるのでは、ということを感じました。



(奨学生の家にて)

最後に会計報告を致します。

| 会計報告 (08・8 ~ 09・7) | | 単位 円 | |
|----------------------|---------|------------|---------|
| 収 入 | | 支 出 | |
| 奨学金寄付 | 156,000 | 現地活動費 | 348,780 |
| その他寄付金 | 143,500 | 印刷費 | 18,431 |
| アルミ缶売却益 | 139,380 | 通信費 | 35,061 |
| 衣類送料寄付金 | 25,000 | 積立金 | 180,000 |
| 葛城山麓を守る会々 | 100,000 | 葛城活動費 | 3,065 |
| 新聞など売却金 | 37,640 | 車両費 | 26,350 |
| 会 費 | 126,000 | 活動費(来日賄い費) | 55,328 |
| 前年度繰越金 | 6,649 | 雑 費 | 57,418 |
| 合 計 | 733,989 | 合 計 | 724,433 |

※ 1パーツ = 3、0円として計算

現地活動費内訳

| | | | |
|---------------|---------|-----------|--------|
| 奨 学 金 | 216,000 | 学用品・ゴムゾーリ | 20,457 |
| 食堂兼講堂建築費(積立金) | 180,000 | 滞在費 | 30,000 |
| 交 通 費 | 50,883 | その他 | 31,440 |

差引残高 9,556円 (次年度に繰り越し)

